

図書館友の会 ニュース

発行 岸和田市図書館友の会 《発行責任者 杉原 富人》

2025 年
1 月号
No. 33

本年もよろしくお願いいたします。

岸和田市図書館友の会 会長 杉原 富人

昨年のトップニュースは、日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）にノーベル平和賞が授与されたことです。これを機に、世界各地の戦地に一刻も早く平和が実現できることを祈念します。

2025 年の干支・乙巳（きのと み）を迎えました。「巳」はいわずもがなヘビを意味し、陰陽五行説では「火の陰」のエネルギーを持ちます。「乙巳」は「火の陰」と「木の陰」で相生の関係にあり、物事が順調に進む年です。困難に直面することもあるかもしれませんが、それにへこたれず進む努力が必要です。そのときに必要になるのが、しなやかに伸びる植物のような柔軟な考え方や協調性、そして「これを絶対に成し遂げる」というヘビのような執着心です。

私たち「図書館友の会」は今年、創立 46 年になります。4 年後の創立 50 周年に向けた記念事業準備を今年から始めたい、と考えています。皆さまのご協力を宜しくお願いします。



図書館友の会 第 3 回史跡を歩くツアー

久米田寺・久米田合戦跡地を歩く

案内/ガイド：杉原富人 氏（図書館友の会会長）

日 時：3 月 16 日（日）午前 9 時集合

集合場所：JR 阪和線久米田駅東出口（少雨決行）

参加費：200 円（保険代 他）

昼食は各自持参してください。

定 員：30 人（先着順。定員に達し次第締め切り）

行 程（徒歩で約 4 時間、約 3.5km）

JR 久米田駅（東口）⇒ 久米田寺（寺境内見学約 1.5 時間）

⇒ 久米田貝吹山古墳 ⇒ 三好実休戦没碑・根来左京首塚

⇒ 浄行寺 ⇒ JR 下松駅（解散：午後 2 時頃）

2 月 15 日（土）10 時より図書館本館（072-422-2142）で受付けます。



精霊殿



三好実休戦没碑

2024 文学歴史散歩



古代にタイムスリップ

天理大学・天理参考館の素晴らしい建物や設備、充実した資料に感嘆。記念写真を撮りました。

「文学歴史散歩」は、今や「図書館友の会」の人気企画。今回（昨年 11 月 15 日実施）も早々と締め切らせていただきました。病気で参加できなかった方もおられ残念でしたが、33 名の方が参加。天理大学天理参考館では学芸員の方から説明を受け、唐子・鍵考古学ミュージアムでは観光ボランティアの方から説明を受けました。

また、今回参加された方の中で新たに5名の方が「図書館友の会」に入会されました。「友の会」は、文章、短歌、詩、再発見、戯曲などの各教室に入らなくても構いません。会員になれば「友の会」の行事には優先的に参加できます。まだ加入されていない方は、ぜひ入会してください。（年会費1000円）

参加者の感想

◇「友の会」の文章教室に入会してよかった

11 月 15 日催行の「文学歴史散歩」に初めて参加させて貰いました。

募集開始直後に締め切りとなる人気企画ということ、一緒にしたご婦人から聞いてびっくり。「友の会」の文章教室に入会していて良かったと感じました。

訪問先のメインは天理参考館と唐子・鍵考古学ミュージアムでした。車でないと行きにくい場所なので、免許を持たない私にはありがたかったです。

参考館では学芸員の女性が、ミュージアムではボランティアの説明員がついてくれました。お陰様で物の見方が良く分かりました。

出色の出来？はお昼に立ち寄った食事処でした。豪華な昼御膳でこの参加費で足がでないのかと思いました。やはり個人ではなく、人数がまとまったからこそできるのだと納得。同時に杉原会長の企画力・交渉力の凄さに驚嘆。

図書館友の会「文章教室」 梶野 昭太郎

◇ やっぱりおもしろい「文学歴史散歩！」

2023年1月、日本最大の円墳である富雄丸山古墳から国内最大の鉄剣「蛇行剣」と、過去に例のない「盾形銅鏡」が発見されたニュースが注目を集めました。いずれも古墳時代における金属工芸の最高傑作と言われ、高い技術を誇るこれらの出土品が国産品であり、新聞で「四世紀倭人の国産力」と紹介されました。前方後円墳である岸和田市の摩湯山古墳と形状は異なりますが、築造時期は同じ四世紀後半と考えられているので出土品に興味津々です。



唐子・鍵考古ミュージアム

今回、天理大学付属天理参考館で富雄丸山古墳出土とされる三角縁神獣鏡の展示があるとのことで、楽しみに参加しました。高速道路を下り、天理大学近くになると道路の両側は美しく紅葉した並木が続き、イチョウの黄葉も見事でした。建物も立派で、自由に見られる収蔵品の量と質の高さに圧倒されました。

はじめに、学芸員・藤原さんから「富雄丸山古墳の中心主体部の埋葬施設はずっと昔に盗掘されたが、今回はそれより北側の下の場所の発掘で、副被葬者の為の『蛇行剣』や『盾形銅鏡』が発見された。その後2年目になって棺の中から銅鏡が3枚見つかり、その中の少なくとも1枚がどうやら中国製らしい。正式な発表を楽しみに待ちましょう。」という最新の解説を聞くことができました。そして江戸時代くらいには富雄丸山古墳の中心主体部から出土したという三角縁神獣鏡3枚をじっくり見ました。また、大きな埴輪の展示では、王の権力を示すために、古墳の周りに円筒埴輪をずらっと並べたが、埴輪の丸型や四角の穴も量産できるように進化したことや、形象埴輪や人物埴輪が登場し、王の行ったことを表すために使われたことをお聞きしました。

開館94周年記念展「芭蕉の根源—北村季吟生誕四百年によせて—」では、季吟や芭蕉の自筆資料を見て、図録を購入しました。帰宅後、図録26番に『源氏物語打聞』北村季任著とあるのを見ました。季吟の孫で、亡くなった長則の弟である季任が、季吟が著した『湖月鈔』（『源氏物語』の注釈書）の中の語句を詳説した、注釈書の注釈書を著していたことを知りました。

後継としての二人の息子や孫の長則に先立たれた季吟の仕事を、季任が繋げたていたのかと、感慨深いものがありました。弟子の芭蕉にも先立たれましたが、芭蕉の遺言によって遺骸が義仲寺に埋葬された時、「義仲寺へ送る悼」の巻頭に詠んだ句「氷るらん足もぬらさで渡川」に季吟の人柄が感じられ、込められた思いにしみじみしました。

唐子・鍵考古ミュージアムでは、観光ボランティアさんの自前のサヌカイト石の重さを実感し、サヌカイト製の鋭いナイフの刃先に驚きました。

唐子・鍵遺跡でも北部九州や中部地方の土器が出土しています。古墳時代の纏向に人や物産が集まったような遠方との交流が弥生時代から既にあったと知り、目を瞠りました。

見聞を広めたり、調べたくなったり、『奥の細道』を久し振りに読みたくなったり…。「文学歴史散歩」でたくさんの刺激をいただきました。ありがとうございました。

図書館友の会「再発見教室」 谷口 富美

図書館友の会「再発見教室」公開講演会

卑弥呼は新生「倭国＝ヤマト王権」の初代王…と力説

昨年11月30日、寺沢薫氏（桜井市纏向学研究センター所長）を迎えて開催した講演会には57名が参加。「卑弥呼とヤマト王権」の考古学的成果である纏向（まきむく）遺跡の出現という重大な事件を中心に新たな『邪馬台国論』を展開されました。

参加者の感想

「魏志倭人伝」の世界を考古学の所見で検証

講演の始まった午後1時40分から3時40分まで、寺沢氏はまさに立板に水の如く、淀みなくそして淡々と自説を展開していく。

恣意的な文献解釈に偏向した「邪馬台国論争」を一蹴し、卑弥呼は邪馬台国の女王ではなく、新生倭国の「共立」された大王であり、奈良盆地東南部の纏向の地こそが「ヤマト王権」の大王都であったこと、そしてその初代大王が卑弥呼であり、その「共立」がAD.204直後の出来事であったことを穏かな語り口ながら確信に満ちた声調で語りかけ、考古学の所見に裏打ちされた「魏志倭人伝」の世界の検証へとわれわれを誘（いざな）う。



「倭人伝」には、『倭女王』『女王国』『倭王』『倭国』や『女王』の記述はあるが、これらは卑弥呼が「邪馬台国女王」であったことを意味せず、実際には「倭国の女王」であり、纏向遺跡は邪馬台（ヤマト）国内にあるが、邪馬台国王都ではなく、倭国の首都（大王都）に他ならない。

劃して、寺沢氏のこの考古学的知見によって『南至邪馬台国女王之所都』という語義の解釈は、一変することになる。
(池田 雅治)

参加者の感想

古代史の謎に迫る話にぐいぐい引き込まれた

「その国本また男子を以て王となしとどまること七、八十年。倭国乱れ相攻伐すること歴年乃ち共に一女子を立てて王となす。名づけて卑弥呼という。」魏志倭人伝の有名な一節から古代史の謎に迫る話にぐいぐいと引き込まれました。「『倭国乱れ』は戦をしたのではなく、多数の国の集まる倭国が政治的に治まらなくなった為に合議により女王を立て卑弥呼が生まれた」「卑弥呼の前の男王は伊都国の王であった」という話も大いに納得！

纏向遺跡はもちろん、九州の平原古墳、三雲井原古墳などを訪ね、糸島市の伊都国博物館で、膨大な数の、想像を超える大きな鏡を実際に見てきたので、先生のお話からはその景色が思い浮かび、まさに興奮のるつぼ！また伊都国の王が一大卒（役人）であったことや帯方郡（朝鮮半島北西部）との繋がりのお話もあり、日本周辺の古代が描かれた壮大な講演でした。
(杉山 優子)



江畑 實氏

江畑實氏(大阪歌人クラブ会長)を迎え、 戦後の短歌の巨人「塚本邦夫」を探る

日時 3月2日(日) 午後1時～2時半

会場 岸和田市立図書館3階自習室

定員 60人 《参加費 無料》

2月12日(水)10時から図書館(072-422-2142)で受付けます。

大阪歌人クラブの会長、江畑實氏をお迎えして、金川先生との対談形式で「戦後の短歌の巨人」「現代短歌の開拓者」とも言われる塚本邦夫について、文学とは何か、そして前衛とは？ 様々な角度から解きほぐします。午後のひと時、江畑實氏と金川宏氏の熱いトークイベントをお楽しみに…。

聞き手
金川 宏氏(歌人)

地名の秘密

③1 八女(やめ)

女にまつわる伝説の地名「山に住む女神の名前」

豊かな風土と歴史をもつ日本。地名には、その土地の伝承から名付けられたものが多くあります。今回は「女」のつく地名「八女(やめ)」を書きました。

八女(やめ)は高級茶「八女茶」の産地として全国に知られています。『日本書紀』巻第七に「この地に女神あり、その名を八女津媛(やめつひめ)といい、常に山中にあり」と記されています。これは第12代景行天皇が筑紫国八女の県(あがた)へ巡幸の折、この地の風景を見て、美しいと感じ、水沼の県主猿大海に尋ねたら「この地方に女神あり、その名を八女津媛といい、常に山中におる」と奏上したことからつけられた地名だと伝わっている。

福岡県八女郡矢部村には、女神を祀った八女津媛神社があり、1300年の歴史があります。「神の窟(いわや)」と呼ばれる洞窟もあり、今も5年に一度、伝統芸能のひとつである「浮立(ふりゅう)」が行われます。

県ではこの「八女津媛神社の浮立(ふりゅう)」を県指定無形文化財に指定しています。「浮立」とは「みやびやかな」の意味である「風流(ふうりゅう)」が平安時代から中世になって「ふうりゅう」でなく「ふりゅう」と呼ばれるようになり、祭りの山車(だし)などの装飾や警固者の奇抜な衣装を総称するようになりました。関西ではあまり聞きませんが。

【資料】『47都道府県・地名の謎と歴史』 kkベストセラー。

『鬼の日本史上』沢史生発行所俳彩流社。その他ウイキペディアメール八女市、浮立

【文責】 文章教室 浦田 榮二

友の会「戯曲教室」公開講演会 参加者の感想

昨年 12 月 15 日に図書館で開かれた「戯曲教室」の公開講演会には 36 名が参加されました。その参加者から寄せられた感想を紹介します。

◇ シェイクスピア劇の魅力と翻案劇

「戯曲教室」くれちあき

先日、戯曲教室で『マクベス』を読み終えた。私にも読めた！という喜びとともに、本当におもしろみがわかるには、当時の風習や時代背景、そして独特の言い回しなどがわかって初めてだとも感じた。今回の井之上淳さんの講演では、数多くの出演、演出作品の中から『ベニスの商人』を題材にした翻案劇『The Merchant of ZIPANG』（演出）の紹介があった。

昔々、なにわの国で、親友次郎（バサーニオ）のために高利貸し沙六（シャイロック）から金を借り、期日までに返せなかったときには、自分の肉一貫目を差し出すとの証文を取り交わしたアンデ（アントーニオ）。金を返せなくなり、裁判で出た判決は「肉は沙六のものであるが、血は一滴たりとも流してはならぬ」という有名な物語。アンデが次郎を思う友情以上の気持ち、は新たな解釈？時代や舞台を変え、なにわ言葉になっても新たな解釈を加えても、揺るがぬものがドシッとある。シェイクスピアの魅力のひとつかもしれない。

◇ 演劇の舞台が作られる過程に触れてよかった

「戯曲教室」廣瀬 晶子

演劇には縁のない生活をしている私が、戯曲教室に参加するようになり何とか本読みをしています。そんな中で、井之上暁さんの講演会に不安ながら参加しました。

最初は話についていけない感じだったのですが、さすが演劇人！張りのある声で熱く語られる話に段々と引き込まれていき、「翻案って何？」というレベルの私でしたが、具体的に作品の時代背景や人間関係、登場人物について様々な角度から考察されていて、現代の社会情勢や人の感情とも関連づけて説明して下さったので、翻案、脚本、演出など演劇の舞台が作られていく過程に触れることが出来て良かったです。

また、戯曲教室での本読みの時、皆さん上手に読まれるので、棒読みで申し訳ないと感じていましたが、最初の本読みは感情を入れずに読むとおっしゃったので、少し安堵しました。2月の五期会上演を楽しみにしています。

◇ 2月16日の五期会公演が楽しみです。

黒川 克枝

今回は、演劇「ザ・スコティッシュプレイ～民の悲劇!」の翻案脚色される井之上さんの講演ということで、大変心待ちにしていました。ダンディな井之上さんの張りのある声、マイク無しでも隅々まで明瞭に届く声、流石!!五期会の今まで上演されてきたシェイクスピア作品の豊富な内容を、スクリーンを見ながらテンポよく進めて下さり、あっという間の2時間でした。

シェイクスピアの頃の王宮、宗教、人種等で差別や争いのある時代背景は、彼の作品に触れるにおいてとても大事な要素なんだとつくづく感じました。しかし、21世紀の今もまさしく不安な世界情勢、現代社会を生きる私達が悶々としているからこそ、井之上さんは、一人ひとりが矛盾や課題に気付きしっかり向き合い考えるきっかけになる作品を、と日々翻案脚色に精進されているのでしょうね。最後の「本読みにチャレンジ」の時間が取れなくて、少し残念でした。2月16日の五期会公演が楽しみです。